

夜に、僕は参っていた。

とある公園。広い敷地と大きなアスレチックが売りのこの場所では、大勢の家族連れや子供たちで賑わう、憩いの場——だった。自身の脳内で残り香のように漂っている、微かな記憶の中では、そうだった。

そんな平和そうで家族の温かみがあるような場所に本来進んで近付かない人間であることは自覚出来ていたが、今は別だった。

影に飲み込まれた巨大な遊具の塊を背に、僕は立ち尽くして。先刻通り過ぎた雨の足跡を見つめる。

足下の水溜まりに映るのは、力無く灯るのっぽな街灯と、その半分程の身長も無いいちっぽけな自分自身だった。

一呼吸置いて、水面に映る顔におはよう、と挨拶をした。この行為は、どうしようもなく皮肉であった。

面を上げると、“星空”という言葉など露知らずとでも言いたげな、薄暗く陰鬱さ蠢く夜空が広がっていた。

その間に上手く溶けるようなグラデーションで、漂う分厚い雲。その下には、背たけを競い合うビル群。それに負けじと赤く光り輝く、街のランドマークの電波塔。

こうして良く良く観察してみると、ひと口に夜と言っても、たくさんの種類がある事が分かる。夜とは、見る日その時々で雰囲気やその表情を変えるものなのだ。

いやしかし、それは観る人の気分や心理状態に依存するかもしれない。観る人が陰鬱としている心のフィルターを通して観る夜は、それは即ち、陰鬱とした夜と見なされるものなのだ。とは言えど逆に、陰鬱とした様子の夜を観たからこそ、心が陰鬱とする訳では無いのか。そこには疑問が残る。

卵が先か鶏が先か。解決の糸口が掴めない問答の思考時間が、無為に無意味に流れしていく。

世間は、もうじき冬に差し掛かるのであろう。少し冷たく乾いた空気が、髪を揺らした。ただ、身体が寒さで震えるような感覚はひとつも無い。

アジト代わりにしていた公園から抜けて街に向かって歩き始め、ふと思考する。夜の帳が下りる、という言葉があるが、とても美しく見映え良い喻えだと思う。

出自や経緯はよく知らないが、蚊帳という歴史的なもの、かつ俳句等でも季語として扱われる代物を盛り込んでいるのがまた奥ゆかしくて良い。

機能的かつ合理的な人工物に囲まれた現代人達には、とても思い付かないような質素で情緒に溢れた表現だ。

と、散々こき下ろしたところで、自身もその大勢の一部であるということを忘れてはいけない。

所詮凡近である自分は、レトロ＝お洒落・流行＝俗物という短絡的かつ悪しき図式からは、逃れられないのだ。

こんな下らない思考で気を紛らわす事しか出来ない位には、精神的に参っていた。精神的に参るということに、馴れ始めていた。その馴れ始めている自分がいるという事実に、心底参っていた。

ここで、最初に戻る。

“終わることの無いこの夜”に対して、僕は参っていた。

この世界が、自分が今まで生きてきた世界では無いことは認知出来了。

正しくは、その答えに至るまでに幾度と無く、自分がおかしくなってしまったのではないかと、まず疑った。

理由として第一に、いつまで経っても睡眠欲が無いことが挙げられた。文字通り、皆無と言つていい。

元来、長期的な睡眠を取らずとも活動出来る人間であったような気もするが、気もするだけであり、正確には分からぬ。どちらであろうと、自分に睡眠が必要無いものであるということが感覚的に理解出来た。これこそ大きな問題だった。

次に、食欲。こちらも清々しい程に皆無であった。元々、食に拘る人間では無かったような気もするが、それも気がするだけであり、結局のところどちらか分からぬ。

分からぬだらけの中、確かなことは、自分は本来睡眠も食欲も人並みにはある、文化的で最低限度の生活が可能な人間だったという事だ。

ここまでなら、まだ自分だけに起きた問題として片付けることは可能だが、これを優に超える異常事態が今も尚広がっているのだ。

それは、どれだけ時間が経っても、景色が永遠に『夜』のまま変わらないということだった。

これは何の喩えや心理的な状態を指すものではなく、まったくそのまま額面通り、『夜』から変わらないのである。

更に具体性を持たせて言うと、時計の針が24時より先に動く瞬間、18時を指し示すのだ。平たく言えば、ループしている。世界は6時間で、リセットされるのだ。

暗闇の世界から、瞬間ビル群を照らす斜陽が確認できる。その橙の光を見る度に、朝焼けの光ではないということに分かりやすく落胆する自分がいた。

では済まなかった。

人が、まったく居ない。存在しない。

自分以外の人間は、誰もいない。

閑散、なんて言葉が可愛く感じられる程に、気配のケの字もない。誇張なく、世界でたった1人の人間になってしまったんだと。そう思い込む他ない程に、誰も居なかつた。

所謂、ゴーストタウン状態。

忽然と人間だけが消えてしまったかの様だった。

ただし、人間が住んでいる、生活をしているという名残だけはすべてそのまま残っていた。

人の話し声が聴こえない、どの場所に行こうが賑わった様子は無い。この場所からは消えてしまった。

車や電車は動いている。ただ、座席には人は誰もいない。まるで自動操縦が実現した未来の世界を味わった感覚になったのは一瞬で、あとは気持ち悪さと不自然さだけが残った。頭上を空気を割く音で飛んでいく飛行機にも、乗客は誰一人いないのだろう。冬真っ盛りの今、イルミネーションや店の灯り、街灯が立つ街の様子は面白い程にそのままで、何とも不気味で、余りに寂れた殺風景だった。

やがて僕は、ひとつの仮説を打ち立てた。

恐らく、自分がおかしくなってしまった訳ではなく。

自分という存在を内包する、世界そのものがおかしくなってしまったのだろう。

正常ではない自分を正常と見なすには、そう思い込む他無かった。それ以外には、もう何も否定も、肯定すらもしたくも無かった。

最初こそ動搖したが、徐々にこの異様な『夜の世界』に馴れ始めている自分が居た。適応力こそが、人類史上最も必要とされるスキルであることは自明の理である。

ただ、当然疑問は浮上する。一体全体どうしてこうなったのか、自分は何に巻き込まれているのか。戦争、疫病、はたまたSFで宇宙人による侵略。勿論答えは出ない上に、どれもこれも漫画の読み過ぎと一蹴されてしまいそうな文字列ばかりが浮かんだ。

自分の住処へと帰れば、一体何が起こっているのかが分かるかも知れないと思った。だが、それは砂糖菓子の如く甘ったるく脆い幻想だった。

記憶を頼りに、自身の家に向かう。小さなアパートの6畳1K、生活必需品以外は何も無い——下手すれば必需品すら無い程に——寂れた部屋。孤独と貧苦を愛する悲しき生き物の巣、という形容が似つかわしい。

この行動の愚かさたるや、正に当初の目論見とは逆効果であった。身辺整理でも行ったのかと言わんばかりに空虚な室内に特別手掛けたりも無く、その上長く滞在すればするほど、自分が何者であったのか、何が目的で、何を夢にして生きていたのか。深海に潜るようにして、考え込んでしまう。娯楽も音も生活感も希望もなく、自分が住んでいたという事実以外は何もかもが霧散したこの場所に座り込み、ただ鬱々と、鬱々とする。

大袈裟でも何でもなく、益々自分が生きている意味が分からなくなってしまった。やがて僕は、外に出た。

現アジトである巨大アスレチックの公園を見つけて以降、二度とこの部屋に戻ろうとは、思わなかった。

自分が生きている意味が、分からない。自分がこれまで、どうして生きていたのか分からない。アイデンティティの喪失なんて生温いものでは無い。綺麗さっぱり、自身の脳内からそれらが次如しているのだから。

自分は学生か、はたまた社会人なのか。街中を歩く時に見かけたショーウィンドウに映る姿としては、凡そ社会人とは言い難い風貌ではあった。ただそれも、全てにおいて想像の域を出ない。

身体の異常に加えて、記憶喪失までこの身に降りかかっているのか。当然ながら、更なる絶望感に苛まれた。

この世界に迷い込んで、何日が過ぎたのだろうか。

いや、そもそも日にちという概念はあるのだろうか。

何周、したのだろうか。それは正に悠久の時間の様に思えた。

電波塔に表示された時計が、決まって18時から24時を周回し、永遠に夜を繰り返し、沈黙が肌を舐めるこの世界で、ただただ僕は徘徊を続けた。

疲れを知らないこの身体は、遠出をするのも余りに適していた。肉体的疲労の蓄積も無く、寒暖の閾値振れ幅も少なく、時間も裏を返せば無限にあるのであれば、無計画に宛もない旅をするのも、ひとつだと考えた。

しかしながら結果としてそれは愚策で、結局また元のスタート位置であるこの街に戻ってしまうことになる。感覚的でしかないが、元々の自分がアクティブな人間ではなかったということが、ひとつ分かった。目的が無い旅をする事の虚しさを一番に痛感しているのは、紛れもない事実だった。

また、知らない場所に足を踏み入れた途端、猛烈な吐き気が込み上げて来たのもひとつ自分自身の発見であった。

ただそれは、何一つ嬉しくない発見であり、自分が何処に行きたいのか、何処で生きるべきなのか、再び何も分からなくなってしまった。僕の身体は、心は、この狭い世界に閉じ込められてしまっているのだろうか。そんな人の気も知らないで、相も変わらず街の光は燐爛と輝いていた。

やがて僕は何の意味もなく、歩道のベンチに腰掛け、並び立つビル群を観察する。

一般的によく使われる社会の歯車という表現は、どうもごてごてで油っこいイメージで好きではなかった。代替として、社会の灯火というのはどうだろうか。幾分か纖細で、幻想的な印象を受けないだろうか。

何故そんなことを突然思考したのかというと、先程から注視していたビルは、確かに著名で大きな商社で、時刻が22時となる今でも無数の窓が爛々と光っているのを見たからだ。

じっと観察してみると、別の窓の灯りがぱっと付いたり、ぱっと消えたりする。安っぽいライターのような印象を受けた。

その光に温もり等は存在せず、ただ冷たく鋭い『社会』の閃光が、彼らの身と心を焦がし殺していくのだ。あくまでもその彼ら…人間が実在すれば、の話であるが。

余りにも無価値で、無意味な思考を、くたびれて生温い溜め息に乗せる。

人間が存在し生活を送っているという痕跡は見えるのに、その元々である人間が、自分には、視認できない。何も変わらないこの世界で、自分の精神だけは、明らかに摩耗し底減りしている。

ふと、アメリカにあるらしい有名な無響室の話を思い出した。

そこでは、音の99.99パーセントが壁に吸収され、『地球で最も静かな場所』と呼ばれているそうだ。

厳密にはこの世界に完全なる静寂は無いが、僕以外の人間が存在しない現状、広義の意味ではそう見なしても良いのではないだろうか。

何が言いたいかというと、外部刺激が極端に少ないと、人間は簡単に気が触れる。無響室に入れられた人間は、一時間も経たない内に精神に異常をきたし、視覚的・聴覚的な幻覚を見ることもあるという。体験者の話を聞いたことはないが、周りが余りに静かで、自分が生きている上で当然発する音が五月蠅く感じるらしい。

また、似たような話で、何もない白い部屋に入れられた人間が発狂するという噂話も、僕が言いたい事に非常に近しい喻えになる。

この夜の世界は、間違いなく僕という人間を追い詰めている。

無響室実験と全く違うことは、僕の発する音は、逆に何も聞こえなくなっている。

僕は、僕自身と僕自身の生への関心をすっかり失っていたのだ。

そうだ。もう、終わりにしても良いのかもしれない。

自分は頑張った、耐え抜いたと胸を張り言う気も更々無いが、現況として自分が生を保つ意味や意義は、ひたすらに無いのではないかと。

この世界に、自身の身をもってして『変化』を、投じるべきなのではないかと。

幽霊の様に走っていく車、電車。そして高い建物。想像で俯瞰しようとするだけで、起伏の無かったはずの感情が妙な高揚感で溢れる。その理由は不明瞭だが、視線は自然かつ悠然とそれらにばかり注がれている。

人類が幾星霜もの時を経て積み上げた高水準の文化レベルの遺産が、この何の甲斐も無い生活を壊してくれることを望むのだ。

そう思い、立ち上がり振り返った瞬間、信じられない光景が双眸に飛び込んできた。

そこに立っていたのは、少女だった。

恐らく人間の、少女。恐らくという言葉を頭に置いたのは、彼女が余りにも、何処で売っているのか皆目検討も付かないような、実に浮世離れしたカラーリングとデザインの衣服を纏っていたからだった。

喻えるに、まるで物語の主人公のような。はたまた未来人、或いは宇宙人のような。非現実的な容姿、風貌だった。

少女は、恐らく古い家電屋なのであろう——ウィンドウ越しに積み上げられたテレビ達を何の気なしに眺めているようであった。

僕は面食らいながらも、今後自身が取るべき行動を冷静に分析した。

これだけ長い時間掛けて練り歩いても会えなかつた、人間。何故このタイミングに。跳ね上がる動悸を抑え、目の前の光景が幻覚ではないことを注意深く確かめた。暫く経って、ようやく声を掛けようと決心した。

声の出し方を確かめるかのように、僕はあの、と力無く声を掛けた。

少女が、ゆっくりとこちらを向く。その水晶のような眼には、警戒の文字は映つて無いように思えた。

自分が怪しい人間では無いことを最短ルートで説明するには、どうしたらいかなど知りもしない。

次の言葉の喉詰まりに狼狽する自分に対し、少女は、優しげに笑いかけてくる。一瞬で、目を惹かれた。近くで見ると益々、人間離れした容姿だった。その様子は余りにも空想上の、精巧で纖細な人形のようで。それでいて、どこか蠱惑的な雰囲気も纏っていた。

やがて、少女はにこりと笑い、僕の手を勢い良く握った。

僕は再びぎょっとして面食らっていたが、それも束の間で、理解が追いつく前に彼女は僕をその場から連れ出した。

暴走する彼女を静止する言葉を何度も、それも懸命に投げかけるも、どうにも様子がおかしい。

少女は、僕が言葉を発する度に振り返りはするものの、ただ笑いかけるだけだった。理由を説明する気も、増してや会話をする気も更々無いと言った様子であった。

何処に向かっているかは全く不明瞭だが、彼女は楽しそうな顔で駆けていく。

夜の世界、鬱屈とした空模様の下で。

孤独と静寂が融けた闇の中で。

つい数時間前まで永遠に自死を決意していた僕を、何処かへと誘っていく。

手を引かれて着いた先は、とある古びた、小さなショッピングモールだつた。もうその様子は正直、廃れている、と言つた方がいいのかもしれなかつた。

自身の記憶でも、“元の世界”で訪れたことがある気がしたが、詳しくは良くは分からぬ。ただ、元来の施設として健康的に機能している様には、とても思えない。

この街やその近隣の施設はほぼほぼ探索済だが、何故かここだけは感覚的に訪れる必要もないと思い、来てはいなかった。シャッター等は閉められておらず勿論警備員等も居らず、こじんまりとした空間が解放されていた。手を引かれるがままに、入っていく。

公園の敷地よりも半分ほど小さなイベントスペースのような広場に隣接したエスカレーターの傍では、申し訳程度かつ乱雑に、イルミネーションやストリングライトが頬垂れていた。

そして少女はその広場に僕を連れ出し、ようやく握っていた手を離した。にこり、と笑顔を見せる。

ここが私の隠れ家、お気に入りの場所などとでも言いたげな、少し得意げな様子に見えた。

少女は、少しここで待っていてと言うかのように目配せし掌を見せ、通路奥へと走っていった。

暫くして、彼女が両手に何か物を抱えて持ってくる。

それは、先程も見かけたイルミネーションやストリングライトの束だった。束の大きさから見るに、そこまで長い訳ではなさそうだ。精々数人で縄跳びが出来る程の長さだろう。

彼女は、その紐状のライトを右手で持ちつつ、左手を小刻みに懸命に上下に振った。どうやら、座れと言われているらしい。僕はひとまず適当にその場に座る。

ひょっとすると、彼女は、僕に何か見世物でも披露するつもりなのだろうか。

いそいそとライトの塊を解いていく少女を脇目に、辺りを見渡した。

特別、何か目立つ物が用意されているわけでもない。スポットライトなどがある様にも、思えない。

そもそも、この時間帯に電気はすべて通っていないのではないだろうか。現に、エスカレーターの近くにあったイルミネーションの類いはすべて消灯されていた。しかも見るからに、少女が持つライトは電池式でなくコンセント式のものだった。

とすると、何故彼女はこの無用の長物を持ってきたのだろうか。どう創意工夫を凝らして、使用するつもりだというのだろうか。

暫くして準備が完了したようで、少女は新体操のリボンのようにライトの端コンセント部分を握り、僅かに体に纏わせつつじっと立っていた。

一体、何が始まるのか。

少女の思考が読めず、ただただその謎の行いを呆然と見送っている。何も考えられず、心が鈍っていたその瞬間。

彼女を纏うイルミネーションライトが、途端に輝き始めた。

何を見ているのか分からなかった。

正に目の前で信じられないことが、起きていた。

慎ましやかに、彩り鮮やかな沢山もの光を纏って。

それを振るわせて。

余りにも静かだった筈の鼓動が、突如鳴った。

静寂と暗闇の中で、全身を逆るみたく脈打った。

彼女は、踊り始めた。

綺麗だった。

それは余りにも、綺麗だった。

それ以外の言葉では、表してはいけない程に。

綺麗だ、と。

自身の口からも、抑えきれずにそんな言葉が漏れた。

感情を抑えきれず、言葉が漏れた。

人の心は十人十色、千差万別だ。

それ故に、心が救われる方法も物事も、人によって全く異なっている。

誰かが嫌悪感を抱き、酷評した音楽も、違う誰かにとっては生きる希望そのものだったりする。

誰かには退屈で胸に響かない映画も、違う誰かにとっては短い人生で幾つ出会えるか分からない傑作だったりする。

敢えて端的に言うならば。

彼女の踊りは、間違いなく僕を救った。

技術の有る無しなどではなく。

表現力の高さ低さ、微かな記憶による無条件反射なども介在しない。

純粹に、純真に、無垢に、清白に、純潔に。

その光景に、胸を打たれた。

纖細で、非凡で、幻想的で、情緒に溢れたワンシーンに。

自分を永遠とも呼べそうな厭世に引きずり込んだ闇の中で、一縷の光を纏う少女に。

僕は、どうしようもなく目を離せないでいた。

何故か、涙が零れた。

あれ、と不思議に思うも、次から次へと落涙して、止まらなかつた。繰り返し拭うも景色が滲み、ぼやけ、その現象は留まるところを知らなかつた。

ぼろぼろと、笑えてくる程に、漫画みたいに、水滴が溢れ出してくる。

渦巻くのは安心、感動、混乱、哀情。どれもこれもがごつた煮だったのだろうか。今まであれほど冷静に物事を俯瞰しようと、分析しようとばかりしていた自分の心が、思考が。まったくと言っていいほど読み取れなかつた。言語化出来なかつた。

何故なのだろう。何故、僕はこの光景に涙するのだろうか。完璧な答えは、何一つ出そうにもなかつた。

ただ、彼女と一緒に居られたら。

今後も、こうして彼女が、楽しそうに踊る姿を見られたなら。

夜明けなんて、無くとも問題ないと。

朝など。もう日なんて、要らないんだと。

その時は、本気でそう思った。

その後、僕達は拠点である公園に訪れていた。

先程のショッピングモールとは割と近しい場所にあったため、数分ほどで到着した。

少女の方を見ると、目を合って相変わらずにこりと笑うのみ。不覚にもどきりとする心臓は、以前よりも随分と喧しくなっているように思えた。

彼女には、色々と尋ねたいことが沢山ある。

そう思い話しかけようとした瞬間、少女はたたた、とアスレチックに向かつて駆けていってしまう。

飛び乗って、よじ登り、楽しそうに遊んでいる姿を見せてくれる。

ひとまずは、まあいいか、と溜息をつく。

そんな様子の僕のことなど露知らず、少女はこちらに笑いかけ、偶に手を振って、遊具との戯れを楽しんでいた。

少女が何を言いたいのか、何がしたいのか、よく分からなかった。精神的に落ち込んだ自分を見て、童心に帰る気持ちの大しさを説いたかったのだろうか。

ただ、今までずっとこの寂れた世界でたった1人の人間だと思い込んで生きていて、自分にとっては孤独の象徴のようにも思い始めていたこの巨大な遊具で、別の人間が愉快に動き回っているのを見ると、少し感慨深いものがあった。

いつの間にか少女は、アスレチックのてっぺんである屋根付きの見張り小屋に、ちょこんと座っていた。

僕も、ひとまずそこに向かうことにした。

少女は足をぶらぶらさせて、体を小さく揺らしていて。登り切った僕は、それに背を向けるような形で座る。

拠点時代にも一度登って見た景色だが、そこから見える景色といえば、遠くに背高のビル達が並ぶだけの無機質な光景しか無く、まったく風情も感じられず興味はそそられなかった。それ以降、もう登ることはなかったのだが。今は、近くに別の人間が——少女がいるという事実が、確実に自分の中の何かを変化させていた。

改めて、僕は彼女に向き直り、質問攻めを始めた。

君は一体何者なのか。

どうやってライトを光らせたのか。

一体世界に何が起きているのか。

他に人間は居るのか。

そうしたこちらの数々の疑問に対して、少女は言葉のキャッチボールをするつもりは毛頭無さそうであった。

ただ、小首を傾げ、微笑むのみ。

居た堪れない空気が蔓延したところで、僕はとある仮説を打ち立てた。

この女の子こそが、この夜の世界の元凶なのではないかと。

その現実離れした風貌や、特殊な能力も手伝って思い浮かぶのは、宇宙人か、はたまた人型兵器か。僕なんかには到底考えも付かない超科学的で超現実的なアイデアと技術で、この世界を根本から丸ごと変えてしまったのだろう

うか。そんなSF小説や漫画の読み過ぎと一蹴されてしまいそうな設定ばかりが、口には出せず脳を通過していく。

僕の物騒な思考とは相反して、彼女からは敵意と呼べるような黒い感情や態度の類いは一切感じられない。

いや、未だ分からぬ。油断した隙について、隠していた鋭く研いだ爪や牙を向くのかもしれない。生き残りが居たぞ、と言わんばかりに。

ただ、それならそれでいいとは思った。もう僕は疲れてしまっていたのだ。この暗闇に蚕食され切った世界に。何の中身もなく、将来性も何もありはしないただ無意味なこの夜の世界を。この生活を彼女が終わらせてくれるのであれば、それでもいいと思った。本気で思っていたからこそ、一点の曇りなく包み隠さず、そう伝えた。

だが、その反応は僕が思ったよりも分かりやすく、そして裏目に出てしまった。

少女は初めて、悲しい、という表情を浮かべていたのだ。

淡く色付いた眉を下げる、硝子細工の様な瞳で、明らかに悲しげに僕を見据えているのだ。少女は僕の作り笑いと唇の動きに対して、まじまじと注視するようになった。気まずさを感じてその行動の意義を問うも、何も返ってこない。

暫くして、少女は先程の悲しげな表情からは一転、元気よく笑みを浮かべた。そして、何か思いついたと言わんばかりにアスレチックから勢いよく飛び降りる。かなりの高さがあったが、ふわりとした様子で何事もなく着地する。

少女に対して僕は恐怖心を隠せず、慌ててアスレチックを安全に降り、少女の元に向かう。

言語が、通じていないのか。確かに、異邦人的な雰囲気は感じられる。

ひょっとすると彼女は、『喋れない』のかもしれない。精神的もしくは身体的な要因なのか、分からぬが可能性としては充分に有り得る。

結局のところ、彼女が一体何者なのかは未だ掴めない。何を考えているのか、何を目的に行動するのか、どんな性格なのか。潤沢なパーソナリティを求めるには、余りに情報が少ない。

ただ恐らく、都合のいい妄想なのかもしれないが、砂漠の中のオアシスのような存在で。この世界における、救済措置のような存在だと思う事で、その場は済ませておくことにした。

そして、僕の新しい生活が始まった。

彼女は、ずっと僕の傍にいてくれた。

孤独や不安は、とうに無意識の内に無くなっていた。

何周目かの夜。彼女も、僕と同じく眠らず食べ物も取らず、疲れを知らずに生きていく人間なのだと分かった。

更に何周目かの夜。相変わらず、会話は無かった。無かつたが、彼女は表情豊かだった。

基本的には、笑顔だった。僕も、この世界に来て笑顔というものを永らく忘れ去っていたような感覚だったが、写鏡、という言葉。ふとあれを思い出した。少しずつ、自分も彼女の行いに対して笑顔を浮かべるようになった気がした。

夜の周期を、共に数え始めた。

当初は砂場で『正』の時を書くことにしていたが、この世界では時折雨が降って無駄になてしまうため、アスレチックの柱に石で傷をつけて書くことにした。電波塔の時間表示はこの場所からでもぎりぎり見えるため、18時になった瞬間に、早い者勝ちでどちらかが付けた。

僕は忘れっぽい性格のようで、彼女に良くリードを許した。リードも何も、そもそもこの勝負に終わりは無いのだろうが。彼女は、勝った時よく笑っていた。

32周目の夜。

電波塔に登ろうとした。今まで余りにも興味がなく惹かれず訪れようとは全く思わなかったが、少女がどうしても行きたそうにするので、仕方なく付き添った。だが、結果は休館日だったのかなんなのか、エレベーターが作動せず、登ることは出来なかった。落ち込む彼女を慰めるように、その丸まつた背中を優しく叩いた。

55周目の夜。

良く2人で街を散歩していたが、その日は気分を変えて街を抜け出して少し遠出をした。だが、やはり気分が悪くなる。身体の疲労はまったく感じない筈なのに、何故こんなことになるのだろうか。少女が、心配そうに僕の顔を覗き込んだ。大丈夫だ、と空元氣で乗り切る様を見せた。

86周目の夜。

ショッピングモールの飾り付けをした。広場は彼女に任せ、僕は通路等を担当した。相変わらず電気が通っているように思えないが、彼女のボディランゲージの指示通りに飾り付けをし終えた。そして2人で横並び、モール内を歩く。

そこで彼女が、再び不思議な力を使った。

飾り付けたライトが、彼女が触れている時だけ順々に光っていく。理屈なんかは、どうでも良かった。それが、僕を喜ばせるための行為なんだということは、彼女の優しく楽しそうな笑顔も合わさって、もう疑いようもない事だった。

100周目の夜。

相変わらず何事も無いが、お祝いをした。

不思議そうな少女に対し、100周記念だと、僕は適当に言った。凄く適當だった。キリがいい数字だから、と付け足して適當さを増強した。

それに対して、彼女は、ただ可愛らしく笑うだけだった。僕も、つられて笑った。そこで、記念にと電波塔に登ることをリベンジしようとしたが、やはり何故かエレベーターが動かない。どうやら自分は相当この塔に嫌われているらしい。再び落胆する彼女を励ます一夜だった。

127周目の夜。

初めて、何の前触れもなく、自分から能動的に彼女と手を繋いでみた。特に大きな反応はなく、何処かへ連れてってくれるのだろうか、という期待みたいなものは瞳から読み取れた。初めて出会った時、彼女がそうしてくれたように、いずれ僕も何処かへ連れていくべきだろう。

スポットとして相応しく無いと思っていたいつもの公園は、110周目辺りで少しだけ飾り付けをしていたから、雰囲気は少しはあった。彼女は、よく分かっていないようだった。

184周目の夜。

散歩していると、夜の色がどんどん濃くなっている事に気が付き始めてきた。最初は、濃い紺色という感じの空模様が多かったが、最近は本当に真っ黒という感じだった。グラデーションの雲も、そこまで見なくなってきた。そういうえば、夕焼けもいつの間にか見なくなっていた。その事を伝えてみると、一瞬哀しい顔をしたような気もするが、直ぐにとぼけた顔になり、わざとらしく首を傾げるのだった。そんな仕草も、堪らなく愛おしく思えた。

200周目の夜。

お祝いをした。200周記念だと、僕は言った。少女は、成程、と手をぽんと打った。三度目の正直だと言い放ち、電波塔に登ることにした。やはり動かないエレベーターだが、少女の力が関係しているのではないかと僕は伝えた。例えば、彼女の力が色々電気を操作するものだと仮定するなら。実は、エレベーターに乗るのが怖いから、動かなくなっているだけなんじゃないかと。そう伝えると、図星だったようで、分かりやすく目を逸らした。非常階段を使い、登ることにした。何故最初からこの手を思いつかなかつたのだろう

うかと以前の自分を責め立てたが、それもすぐに霧散し、ようやくメインデッキと呼ばれる観覧席に到着。街を一望できる景色に、かなりはしゃぐ少女。だが、やはり高所すぎるのは苦手らしく、窓にはあまり近付かなかつた。何にせよ、今夜でようやく彼女との逢い引きらしい逢い引きと相成つた。

226周目の夜。

彼女が、アスレチックで遊んでいると足を滑らせて墜落しかけた。奇跡的にすぐ下に僕がいたので、キャッチすることが出来た。彼女は重さはほとんど無く、まるで発泡スチロールを抱き込んだような感覚だった。以前までの自分だったら非現実的だと驚いていたに違いない。でも、そんなことはもうどうでも良いほど、彼女の驚き顔と眼が合って、かなり近くで見詰め合っていた。直ぐに下ろし、その後危険だと注意すると、申し訳なさそうな顔はしていた。そもそも僕らには痛覚が無いのだから、注意する事など、正直無い事に、すぐに気がついたが。同時に、それ以降何故か彼女とは目線が合わなくなつた。

250周目の夜。

今日も今日とて散歩。何度目か、少し久々にこちらから手を繋いでみた。すると、彼女が初めて少し恥しそうな様子を見せた。新鮮な反応に、僕も何故だか恥ずかしくなつて、手を繋いでる間は、お互い眼を合わせることは無かつた。結局、手を離したあとも、同じように眼を合わせることは無かつた。

299周目の夜。

僕は、今までの夜を思い返していた。

言葉はなくとも、僕は彼女と生きてきたのだという。

妙な誇らしさが、心には生まれていた。

明日——この表現が合っているのかは微妙だが——僕は、彼女にきちんと思いを伝えようと思う。

三回目の記念日なのだから。

ただ。

明日を迎えるに当たつて、どうしても、気になることがあった。

やはり、勘違いでは無いようだ。

街の点っている電灯の数が、明らかに減つてゐる。

250周目を過ぎたあたりから、露骨に減り始めてきた。

また、車や電車も、もう何処も走つてはいなかつた。いつからだろうか。更に、空の色が濃くなってきた気がした。

特に気にかけないようにしていたが、彼女との散歩の際に暗すぎる場所を歩くのは少し抵抗があった。

街にある電気の供給に、何か異常が出てきたのかもしれない。この世界に起こることは、明らかに常識的では無いのだから。何が起こってもおかしくは無い。

自己完結し、また違う夜に原因を探つてみるかと考えた。

300周目の夜。

時間は直ぐに流れ、あっという間にそれは訪れた。

僕は、ショッピングモールの広場に彼女を連れてきた。

そして。

この世界から抜け出そう、と。

僕はそう言った。

2人で、抜け出して。

抜け出す方法を、今から探して。

必ず見つけだして。

何処までも、一緒に生きて。

一緒に、暮らしていくこと。

彼女の恥しそうな、でも嬉しそうな。

そんな、彼女の顔が見たくて、僕は。

精一杯、想いを伝えた。

すると。

突如。黒い塊が、彼女の背後に出現した。

黒い塊。そうとしか、言いようがない。

直径2メートルくらいの球体だろうか。

彼女の背後に、皆既日食のような存在感で。

その場に、あった。

僕が言葉を発しようとした瞬間、景色が完全にがらりと変わった。目の前に、彼女はいない。

あるのは、力なく項垂れた電飾と無機質なショーウィンドウ。

どうやら、僕の身体は広場を抜けた通路の奥へと押し出されたらしい。目の前で、気味悪く棘を出して蠢く黒い塊の、衝撃によって。

僕の身体は、更に別の場所へと跳ばされる。痛覚が無いため、いやに鈍く妙な脳震盪のような状態で、吹き飛んだ全身を転げ回される。弾き飛ばされる。

何度も何度も何度も何度も跳ばされ、何度も何度も何度も必死で立ち上がる繰り返すも、目の前にあるのは、いつも同じものだった。意志も感情も何も持たない、ただ根源的な『拒絶』が、立ちはだかってくる。

痛覚は相変わらず無いが、ふと全身を見ると衣服は擦れて破れ、肌は切り裂かれ擦り傷だらけになっていた。紛うことなき恐怖の感情が芽生え、ただただ無我夢中で、建物の物陰や奥の路地裏に逃げ込んでいく。

一瞬だけでも撒けたか、そう思った時、不思議な光景が目に飛び込んでくる。

そこは、街の中だった。自分は、あのショッピングモールから街の中まで飛ばされてきたというのだろうか。

物理法則的にも距離的にも説明が付かない気がしたが、そもそも論である。深く考えても無駄でしかない。

意を決して、物陰から飛び出し、走り抜けていく。

彼女は、無事だろうか。うまく逃げられているか、隠れられているのだろうか。

僕達は、一体何に攻撃されているのだろう。どれだけ考えを張り巡らせようと、心当たりも無いし予測も出来ない。

ただがむしゃらに走り抜けていると、偶然にも彼女と初めて出会った場所である、古い家電屋の前に来ていた。

一瞬。積み上がった幾つかのテレビと、ウィンドウ越しに眼が合った、次の瞬間。

その画面が、一斉に点灯した。

そこには、人間がいた。

正しくは、顔の見えない——自分を襲ってきた黒い塊と似た物体で顔全体を覆われた、人間。

半分砂嵐状態で音声もこもっている上、割れて聞き取りづらいが、どうやらニュース番組が映されているらしい。

久方振りの自分以外の人間の声が耳に飛び込んできたせいか、思わず聞き込んでしまう。

『本日未明——市内モール——飛び降——ましたが——電飾——引つか——かろう——命を取り留——意識不明の重——一』

所々ぶつ切りにされた音声と、映し出された見覚えのある景色や、一瞬飛び込む血痕。その報道の意味について、何かを思考する前に。

僕の身体は、とてつもない衝撃と共に地面でバウンドし、前方へと弾き飛ばされていた。

背後から、思い切り攻撃を受けたらしい。

顔面の骨のどこかが明らかに粉碎した感覚を味わう。

すぐさま腕を叩きつけ、立ち上がるも。

目の前にはチェックメイトと言わんばかりに、黒い塊が、ただそこに在った。

それは幾つもの棘を出し入れし、自身の幅を広げるかのように更に大きさを増している。

勢いよく壁に叩きつけられた、ペンキのように。

空間にぽっかりと空いた、穴のように。

すべてを吸引するブラックホールのように。

大口を開けた、いや、口そのもので出来た怪物のように。

まるで、僕を丸ごと飲み込もうとしているかのように。

急ぎ背を向けて逃げようとするが、黒い塊の伸ばしてきた棘が、トリモチのように身体にまとわりついてきた。

一心不乱に抵抗するが、嘲笑うかのように粘着する棘の数を増やしていく。無駄な抵抗と咆哮が高層ビルを反射し、虚しく飲み込んでいく。ぼやけた視界に映るのは、先程観たものと同じニュース映像が流れる、ビルに埋め込まれた大型のディスプレイ。

そして。その前に、少女がいた。

まるでスイッチを入れた瞬間につく光の様に。

目の前に、ただ少女が在った。

どうやってここまで来たのか、何故そこにいるのか、など。今は心底どうでもよかつた。

この黒い塊の原因は、目の前にあるということが。
状況的に、感覚的に、自然的に、解ってしまった。

自身の双眸に映るのは、1回だけしか見たことの無い、哀しい表情。
ただ、その時よりも、更に深い哀しみに覆われた表情に見えた。
その理由は、分からぬ。
分からぬが、そんな顔をして欲しくはなかった。
見たくない。
そんな顔は、見たくない。
僕は刹那、奥底で唱え続ける。

僕は、君と生きていきたいと思ったから、たくさんの夜を超えてきた。
夜を生きる希望を、見つけることが出来たんだ。
もう、助けてくれとは言わない。
たくさん君からは貰った。
感謝しかしていない。
でも、こんな終わりは求めちゃいない。
求めちゃいないんだ。

だから、何か言ってくれ。
そんな顔をしないでくれ。
ずぶずぶ、と。まとわりつく闇が腕のように全身を掴み。
そして、引きずり込んでいく。
お願ひだ。何か、言葉を掛けてくれ。
たった一言でいいから。君の声が聞きたい。

そして。彼女が、指さす。
その先には、この街のランドマークである電波塔があった。

だから、なんだと言うのか。
君は、僕を拒絶したのか。その上、あの塔を指さして。
もう眼にも入れたくない。何度見たか分からない。
忌まわしき時間を示す塔。夜を繰り返している、ループしている事実を無理
やり教えてくる、ただそれだけの塔。

ただぽつんと立ち尽くしただけの、僕に絶望しか与えないだけの、無能で無価値な電波塔。

あれがなんだと言うのか。

僕が、それみたいだとでも言うのか。

何の価値もなく、誰からも必要とされず、ただ変わっていない事だけを求められるような、そんな僕が。

君の、大切にはなれないのか。

僕は、君にとって大切なのはなかったのか。

それなら、何でそんな今にも泣きそうな顔をするんだ。

教えて欲しい。

今だからこそ。僕が、今からこの世界から消えてしまうのだとしても。ここで君と出会えたことを、ずっと。

ずっと忘れないようにするためにも。

君の名前が知りたい。

君の名前を、教えて欲しい。

僕は叫んだ。力の限り、喉を震わせた。

そして、返ってきた言葉は。

「さ、 よ」

さよ。サヨ、 小夜。

およそ似つかわしくない文字列が、頭のなかで閃光の様に並んでは消えていく。

だが、そんな変換がとてもなく無価値であることを、僕は知る。思い知る。

それが、名前を示した言葉では無いということを。僕は次の瞬間に。

残酷な程に、知った。

「さよなら」

彼女は笑って、そして泣いて。
そう言った。

僕の意識は、深い闇の中に落ちて。
そして、夜が去った。

瞼が裂けて、呼吸が爆ぜた。
脈動する感情と心臓を確かに感じながら、柔らかな何かに体が沈んでいる感覚も同時に芽生えた。
零が一筋、頬を転がっていった。
ベッドの上。それは確かだった。
視界には、夜も街も映っていなかった。
ただ薄暗い天井が、無機質な顔で僕の姿を見下していた。

少女の事を考えるよりも先に。
途端、異質なものばかりが眼に飛び込む。
自身の手足を包む巨大なギプス、点滴。
何か薬液のような独特の匂いが、鼻腔を犯してくる。
そして、医療用の防護服のようなものを纏った人間が数人、僕を取り囲んだ。
大声で、色々と話し合っていた。何を言っているのかは、良く聞き取れない。僕がここに居ることが、何かおかしいのだろうか。
視界も聴力も不十分であったが、痛覚はあった。
全身がじりじりと焦がされていくような痛みがある。
特に頭、足が割れるように痛い。逆に、右手には何一つ感覚が無い。
自身の身体が異常事態に晒されていることは火を見るより明らかであった。

その後は、痛みで再び意識が朦朧としていてよく覚えていないが——別の部屋へと僕の身は運ばれた。
飛び交う防護服の集団に、辺りに様々な機械が密集する場所で、全身をくまなく確認されて。
何度か嘔吐や気絶もしたようだ。酸味を帯びた嫌悪感が、喉の奥から脣に至るまで這いずり回っていた。

それから、どれぐらい時間が経ったか解らないが。
長時間の疲労と暴走と疑問との格闘の末、ようやく、僕の肉体と精神は自由の身になった。

——ここは、病院です。

再び病室に戻されて、落ち着いた僕を前に、男の医師が物腰柔らかに説明し始めた。

防護服越しではなく、生身で向かい合っていた。少女以外の人間と目を合わせる行為自体が、余りにも、久々の感覚だった。

——何があったか覚えていますか？

僕は彼の言葉に対して、何も言えなかった。

それは当然、自身が何故病院にいるのか心当たりがあるからだ。

僕が天国にも地獄にもいけなかつたのであるならば、奇跡的に生き延びてしまつたのならば。

生き長らえてしまつたのならば。

当然、この場所に居るはずなのだから。

医師は、“この現実世界の僕自身に”何が起きたのかすべて解って悟っている僕の様子を気遣いつつ、信じられないかもしだすがと前置きし、語り始めた。

病名、ナイトルール症候群。通称、“夜”。

僕の身体と精神は、その病氣によって蝕まれていたらしい。

10年前より全世界的に患者が発見されているが、症例が非常に少なく、感染経路、そもそもウイルス感染によるものかもまったくの不明。日本でも数年前から難病指定にされたが、世間での認知度はそこまで高くないという。現に、自分は知らなかつた。国内では3人目の患者と聞かされた。

症状が他難病と比べても余りに特殊ケースかつ、非科学的で未解明部分が多いそうだ。

症状の第一段階として、発症者は意識を完全に失い、深い睡眠状態に陥る。生命活動は問題なく行われ、脳や心臓の動きも緩やかで特に影響はない。極端に言ってしまえば、所謂ノンレム睡眠状態に近い、とのことだ。

しかし、その後体内細胞及び皮膚細胞に墨のような“黒ずみ”が発生。生命活動には特に影響なく、ただ黒ずみが皮膚全体に広がっていく。

第二段階で、体内にも黒ずみが進行し、末期になると最終的に血管、臓器及び脳に至るまで、全身が闇に飲み込まれたかのように黒く染まる。

その後の経過を観察すると、燃焼が終わった炭のようぼろぼろと崩れて、消滅するらしい。

霧散という言葉が似つかわしく、その場から跡形も無くなるとの事で、前置きされた言葉に相応しい末路が待っていた。

黒ずみの成分を分析するも、現段階でも未知の物質であり、宿主の身体を離れた数秒後に文字通り消滅するため、採取及び保存も不可能。これまで国々が名を挙げて資金をつぎ込み、様々な検査や実験が散々執り行われたがすべて徒労に終わる。治療や手術も不可能で、特効薬及びワクチンの開発もまったく進まない状況。発症もきっかけ及び理由すべて不明。自然回復を待つしかない現状で、医療関連学会が総じて音を上げる病であるとのこと。

ところが発症者のうち何人かは完全回復し、この黒ずみが身体中から跡形もなく消え去るらしい。そして理屈は不明だが、抗体が出来るようあり、全身の黒ずみはひとつ残らず消滅し、その後病の再発例は過去一度も無い。君がその内の一人だ、と知らされる。

すべてが信じ難い話だが、冗談を言うような、言えるような雰囲気ではない。

そして、更に有り得なくて非現実的な——だが今まで確かに経験してきた話が、僕の心を揺さぶる。

数限られた回復後の患者にヒアリングすると、皆等しく『夜を繰り返す世界』で生きてきたと答えたという。

全体の回答を纏めたところ、その対象者の精神構造の一部がそのまま夜の世界にて顕現するようだ。精神と記憶の関係性は未解明だが、結局精神の引き継ぎが行われるだけのようで、現世での記憶部分については曖昧な部分が多い。また全体的に、悲観的で厭世観を持つ者が傾向として多かったとのこと。

そして更に驚くべきことは、ロケーションは各々違えど発症した人間はもれなく全員、その夜だけを繰り返す世界で、『とある少女』を見たと答えていたということだった。

また、別の発症者の姿を発見した例もあったという。

これにより、『夜の世界』が患者全員の脳内にて共有される世界であることが、仮説として挙げられた。

少女の姿格好はかなり浮いており、人よっては異星人のように見えたり、異人のように見えたりする。こちらの言葉には理解を示し、非常に友好的である。以前までは言葉を話すことが確認出来たが、最近では自由に言葉を話せなくなっている。

また同様に、最近の症例では夜の世界の異常が確認出来たとのこと。それまでの発症者の語る世界では現実世界と同じく人間が沢山いたが、最近では忽然と消えてしまったという。その代わり、建物の灯りや乗り物等の灯りは付いたまま——つまり、自分以外の人間がすべて透明になってしまったかのような状態に陥ったとのこと。

そこで一旦、僕は医師の話を打ち切った。

少女について、何かを聞き出したかったのだ。

そして医師が語る内容は、僕が期待したようなものではなく、あまりに絶望的だった。

少女は今も尚、この現実世界に実在するという。

ただし、都内の医療機関にて、今も尚治療中とは名ばかりの放置、観察状態であると。

そう。その少女も同じく『夜』を患っているのだ。

ただ自分達他の発症者との差は、黒ずみの進行が非常に遅く、栄養剤及び排泄も必要ないという、極めて非現実的かつ人間離れした状態であるとのこと。

ただ、発症が確認されてからおよそ10年、一度も目覚めていない。その他のケースでは、発症してから全身に黒ずみが渡るまで、平均で1週間程であることから——因みに僕は発症が確認されて治癒まで3日間であった——その時間は、余りにも異常であることが分かる。

ただ。現状、もう長くはないと言われているそうだ。

とうとう、脳の一部と心臓以外は、すべて黒ずんでしまっているらしい。

残すは、その二箇所程であると。助かる見込みは、絶望的だと。

これ迄の発症者の話、及び夜の世界の崩壊を踏まえて、少女と夜の世界は、結び付きが強く共依存の関係となっていると考えられていた。僕の夜の世界での経験も話したところ、その仮説はかなり補強されると医師は表情ひとつ変えず話していた。

残酷な話ではあるが、医師にとっては彼女自身が『夜』そのものであるという見解らしい。その彼女がもし消滅してしまうのであれば、この『夜』の病も、同様に消えるのではないかと。

そういった、希望的観測を抱くことしか出来ないこの状況が、医師としてあまりに不甲斐ない状況であると無表情で嘆いていた。

すべてを聞き終えた僕にとっては、医師の辛酸など、『夜』の末路など、心底どうでもよかつた。

自分がこの世界でどういう人間だったのか、何をして現在こうなっているのかなどの記憶も、今後訪れる可能性があることや、滾々と湧いてくる考えもすべて、やはりどうでもよかつた。一度捨てようとしたものに対して、もう執着が湧くことは無かつた。

この世界には、僕の居場所はない。夜の世界でだけ、僕は僕であった。そこで主人公として生きる彼女の、“脇役”として、“引き立て役”と成れたのだ。その思考は、一種の呪いのように僕の心にへばりついていた。

尚ぼつぼつと喋り続ける医師から目を逸らし、近くの窓を見た。

陰鬱な色をした空に、溶け込むように白い帳が上がりかけていた。無機なコンクリート群に埋め込まれた灯火の火種が、ゆったりと温かさを纏っていく。

つい先程まで二人でずっと待ち望んでいた筈の光景に、僕は酷く胸が締め付けられる感覚を覚えた。

この痛みと苦しみは、誰にも分からない。

故に、分かり合う必要もない。

ずっと抱え込んだまま、生活は過ぎていく。

何の成果も無い後日譚として。

因果応報というべきか、かなり不自由な日々を強いられたが、何とか日常生活を送れる程に回復できた。普段人に感謝をしない自分であるが、こればかりはリハビリのスタッフにささやかなる恩情を抱く他なかった。

退院してから半年後。僕は、久しく夜の街を歩いていた。

辺りは、見慣れた上に何度も探索した光景ばかりが広がっている。違うべきは、夜の世界に行く前よりも思っていた以上に騒々しく臭く眩かったことか。

目指すべき場所は、電波塔だった。今までの自分であれば、縁もゆかりも無い、決して向かうことの無い場所だった。

観覧チケット発券の受付で、『LUNA TOWER GUIDE BOOK』と書かれたパンフレットを受け取る。

街を一望出来る地上から高さ150mのメインデッキからの景色、そして250m地点のトップデッキでの回廊は星や月をイメージしたLED照明やイルミネーションが特別な夜を演出する——改めて、自身にとってこのロケーションが無縁であることを認識する。

エレベーターに乗り、メインデッキの展望台まで上がってみる。多くの子連れやカップルなど、人でごった返している。

その隙間を縫って、巨大な窓側へと近付く。

何処までも広がっているように見える街の光が、目を乾かしていく。多くの人や働きや繋がりが生み出すその灯火たちは、どれも何の感情もなくすべてを照らしていて。この場にいる人達を、観る人を皆夢中にさせていて。

僕自身も率直な気持ちで、多少の思い出補正というのがあるとしても。

綺麗だ、とぽつりと思った。

最後に夜の世界で、少女がこの電波塔を指さした。

その理由だけが、どうしても気になっていた。

パンフレットを見てとある事に気が付き、彼女の直前の疑問と合わさってひとつ答えるに辿り着いたが、彼女が言いたかったことはきっとそれだけではないのだと。そう想うこととした。

ひとつの答えを出して終わらせるということを、終わらせようと思った。

そしてもう1つの目玉らしいトップデッキには向かわず、すぐにエレベーターに乗って下へと向かった。

やはり今の自分には、ここは相応しく無かった。

誰よりも高く、爛々と輝く塔を後に、また歩き始めた。

巨大なアスレチックの頂上。そこでただ緩やかな風に当たりながら、こんな夜遅くでも未だ賑わう街を遠目に見つめていた。何故だか、妙に落ち着いた。

柱には、何の傷跡も無かった。分かっていた。分かってはいたが、あの夜の世界はこの現実と物理的にリンクしている訳では無い。

だからこそ、もうその選択肢以外は無いのだと、痛いほどに分かっていた。
分かつてはいた。
でも、分かりたくなかった。

なんでもない時間。
忘れようとした時間。
忘れられなかつた時間。
結局、生きていこうと思った時間。
ずっと待つ。この世界で、ずっと君を待っても意味が無いとしたら。
ある事をいつか試してみて、また会えるなら。
そんな事がもし、可能であるならば。
いや、きっと出来ないだろう。
でも、そんな事を考える時間ですら、僕が生きていくために必要な時間だ。
拭っても拭ってもちつとも消えない今の僕の厭世観の中で、唯一光っているものは。
あの世界で君から気付かされたことは。
きっと、もう僕ら以外は誰も知りえない。
終わることは無い。

すべてを飲み込むような暗鬱な夜空に、白靄が染み込んでいく。
静寂と浮遊感に塗れた心に、ある種の心地良さを覚えた。

「さよなら」

僕はそう言って笑った。
そして言葉通りでは全くなく、目が覚めて。

この世界は、当然のように朝になった。

※※※※※※

夜に、私は参っていた。

そう思えたのは、何周目以来だっただろう。

もう、数えることはやめている。

何をしても、無駄と分かっているからだ。

すでに、辺りは何も無い。光も、音も、何もかもが無くて。

ただ、暗闇だった。

すべて無駄だと分かっているのに、何故こんな思考をしてしまうんだろう。

それ程までに、このもうすぐ終わってしまう世界は退屈で窮屈で余りにも弱々しかった。

初めは、この世界のことは手に取るようにわかった。

この世界は、私を掴んで離さない。

と言うよりも、私がそれを選んだ。

私以外の人が、この世界に囚われるのは間違っていると思ったからだ。私以外の人が、あまりにも苦しそうだったから。それは間違いだと思った。思い込んだ。

迷い込んだ人は、みんな似ていた。

私は、その人が覚えていないこともどんな生き方をしてきたのか、どうして世界から逃げたいと思ったのか、全部わかつてしまった。

そして、どんなことだって出来た。

その人たちがこの世界から抜け出そうと思えるきっかけになるなら、なんだって出来た。

ただそれだけが、自分の生きる理由なんだと。

もうその苦しみなんてとっくに忘れてしまったけど——前の世界では見つけられなかった、生きていく意味なんだと。そう自分を縛り付けていた。

それが、ただの偽善だって思われていたとしても。
誰かには、届いているといいなと。そんな思考も、もうすぐ跡形もなくなくなってしまうというのに。

そう。この世界は、もうすぐ終わる。
私の身体が持たないから。
最近なにもできなくなってきたから、わかった。
終わったあとはどうなるのだろう。
また、新しい世界が出来るのだろうか。
私のように、世界に気に入られる人が生まれるんだろうか。
そして、私をこの世界に繋ぎ止めるための犠牲者が、また生まれるんだろうか。
何にせよ、皆幸せならいいな。
幸せに生きていこうって、思ってくれるといいな。
自分が優れた人間なんだって思わなくてもいいから。
優れた人間になれないってわかつてもいいから。
ずっとやめてほしくないな。生きていくことを。

目を閉じようかなと、何度か思った。
そもそも、辺りが真っ暗だから、もう既に目を閉じているのと同じなんじゃないかと思う。
でも、きっとそういうことじゃなく。
本当の、おやすみが出来るだろうから。
もう、ずっと起きていることに疲れたから。
そろそろだと、本気でそう思っていた。

その時。
遠くに、確かに何かが見えた。
暗闇の中に、何か光るものがある。
ゆっくりと、鏽びた鉄の玩具みたいな動きで、その光に向かって歩いていく。
どんどん、身体の一部がぼろぼろと崩れていくみたいな感覚だった。
でも、諦めずに歩いた。
すると。

そこには、見知った顔の男の子が、いた。
私は吃驚して、話しかけようとした。
でももう声は、どれだけ振り絞っても出ない。
彼に、ただひとこと別れの言葉を告げた時から、もう出ることは無い。咄嗟に、ぎこちない動きで身振り手振りする。

すると彼はそんな私の様子を、とても優しそうな目で見据えていた。
そして彼は、笑った。自分の胸に手を置いて。
高揚しているような様子で。
本当にうまくいった、と。
賭けに勝った、と。

その言葉の意味は、わかるようでわからなかった。
ただわかったのは、彼が私に会いに来てくれたのだということ。
もう終わる私に、会いに来てくれたのだということ。
彼も、もうすぐ終わるんだ。
一緒に、終わるんだ。
気のせいかもしれないけれど。
私の身体の中で、彼の温もりを感じたような気がした。

私の目から、何故か涙がこぼれた。
もう、何も出ないはずだったのに。
温度も光も失って、出来損ないの、身体になったはずだったのに。
まだ、自分からこんなあたたかい何かが出るなんて。

私は、口を開いた。
声は出ないけど、ゆっくりと。確かめるように、口を開く。
寂しかった。
私は、そう言った。言葉なんかなくとも。
触れてなんかなくとも。
彼には、きっとそれがわかった。

僕も同じだ、と。彼は言った。
私たちは、笑いあった。
一瞬だけ、辺りがあの日二人でよく過ごした公園になったような気がした。

そして、もうそこには誰もいなかった。
私も、彼も。誰もいない。
ただの、大きなアスレチックがある公園で。

そして、夜が。
夜が去った。
何もかもが去って。
「おはよう」と。
「さよなら」を。
改めて二人は、伝えあって。
この世界が、目を覚まして。

そして、朝になった。

